

＜異文化＞との出会い —〈表象〉としての〈文化〉*

荒木正純は、この時代の文部省官吏として、その才能と勤勉さで知られる。彼は、明治初期から文部省に勤務し、主に農業教育や農業政策に関する研究を行った。特に、農業教育の発展と農業技術の普及に貢献した。また、農業政策の立案にも関与し、日本の農業生産の向上に大きく寄与した。

1

ひとは、人間が太古から<異文化>に出会ってきただと思うことであろう。しかし、ここで、<異文化>ということばで何が指し示めされているかを今一度考えなおしてみると、単純にそうとはいえないくなる。

文化人類学者エドワード・ホールは、つぎのような表現を用いて「文化」についてその考え方を述べている――

結論として、こうしたすべての危機的状況のなかで、未来のよってたつところは、ひとが個々の文化の限界を超越することができるかどうかである。しかし、そうするためには、ひととはまず、無意識文化をなす多様な隠れた諸次元を認識し、うけいれなくてはならない。なぜなら、どの文化にも、それ独自の隠れた、固有の形態の無意識文化があるからである。(1)

これは、精神分析学の考え方を文化に適応したものと容易にわかるが、われわれが注目したいことは、<文化>に<限界>があるという考え方である。もちろん、ここには精神分析学の<自己>を<文化>にすりかえているわけである。この是非はともかく、<文化>に<限界>があるということは、<文化>がつぎのような構造をなして、空間化・区分化されて存在していることになろう。

The diagram consists of three rectangular boxes arranged horizontally. Each box contains the text '純粹文化' followed by a number (1, 2, or 3). Dashed lines connect the boxes from left to right, creating a chain-like structure.

すると、<純粹文化1>と<純粹文化2>との間には、<無文化地帯>が存在していることになろう。われわれは、<文化>には「個々」も「限界」もないと考える。したがって、つぎのような構造を想定したい。

文化1／文化2／文化3／文化4／…

「／」の部分は、共通部分である。その範囲は、多様であろう。ホールのような構造を想定するなら、「異文化接觸」が問題となり、理解には個々の純粹的な文化を超える必要がでてくる。しかし、共通部分を追求していけば、限界は存在しなくなろう。

しかし、何故<異>文化を想定しなくてはならないのか。そのことをわれわれは吟味しなくてはならない。<異>を英語で'foreign'、あるいは'alien'というとしてみよう。その語源はつぎのようなものとなる。――

foreign [L (foris outside)]

alien [L = belonging to another (alius other)]

つまり、<内／外>あるいは<自／他>の差異化が前提とされている。人類は、いつこうした差異化を命題化したのであろうか。実は、人類の定住化と関係がある。つまり、<自己>の所有、<他者>の所有という考え方と関係がある。以下、このことを論じることになる。

そもそも<文化>は、太古から存在していたのであろうか。わたしは<野蛮状態>の対称的状態のことをいっているわけではない。日本語<文化>は、すくなくとも英語'culture'の翻訳語であるとしよう。英語語源辞典(2)は、その意味としてつぎの説明をあげている。――

culture n. 1 《?1440》耕作。

2 《a1475》 - 《1757》耕作地。

3 《c1510 T. Moore》(心身の)訓練。

4 《1626 Bacon》栽培。

5 《1796》養殖。

6 《1805 Wordsworth》教養。

7 《1867》文化。

ここからわかるることは、1867年にやっと<文化>という概念で、'culture'という語が使用されはじめたということである。つまり、1867年以前には、英國に<文化>という概念が存在しなかったということだ。しかしこれは、英國が文化果つる地であったということではない。世界的に權威的英語辞典『オクスフォード英語辞典』(OED)

によれば、文献的に最初に＜文化＞概念を使用した例は、つぎのようになっている。

1867 FREEMAN Norm. Conq. (1876) I. iv. 150 A language and culture which was wholly alien to them.

OEDはひきつづき、つぎの例をあげている。

1871 E. B. TAYLOR (title) Primitive culture.

このふたつの例は、＜文化＞の概念の特性を明示している。つまり「異質の」(alien)と「原始的な」(primitive)という語が付着している。つまり、「異質」ということは「同質」を対概念とし、また「原始的」は「進歩的」あるいは「発展した」を対概念とする。

「異質」も「原始的」も、実は同じことなのである。それは'culture'の意味として、「文化」の直前のものが「教養」であることを思えばよい。つまり、「教養」から「文化」へ、なのである。だから、「文化」はどこかで「教養」をひきずっている。「同質の／発展した」「文化」が「教養」であって、「異質の／原始的」「文化」が「野蛮」なのである。そもそもE. B. タイラーはオックスフォード大学の初代人類学の教授であった。未開社会の文化を「原始的」と称したのである。

であるとすれば、「異文化」と聞くと、どうしてもどこかで、「未開社会の」「野蛮な」「文化」のことを連想してしまうが、それも自然のことである。すくなくとも、19世紀後半はそうであった。「教養」という概念は啓蒙主義の影響下に成立したといえ、「文化」という概念は、進化論の影響をうけて成立したといえる。だから、20世紀も終わろうとしている今日、「民衆文化」「民族文化」などの概念が成立し、文化研究や多文化主義の進展にともない、「異文化」は、「異」なった、あるいは「差異をもつ」「文化」ということになっている。ここまでいたるためには、「文化」概念は、脱・啓蒙主義と脱・進化論を経由しなくてはならなかつた。

したがって、この論のタイトル「異文化との出会い」をこの意味に解するなら、こうした事態はやっと20世紀末になってはじめて、人間に、いやく<culture>を生活の様式にしてきた者に可能になったのである。太古の人間には可能ではなかつた。

2

わたしは、「異文化」から「異・文化」へ、さらに「文化」とは「異なつた」もの、つまり「文化」ではないものについて話を進めたい。つまり「脱・文化」ともいるべき事態である。

英語'culture'の語源は、つぎのようになっている。

L (cult- colo to till, worship, inhabit); cf. CULT
語根の意味として、「耕作する」「崇拝する」「居住する」があるというのだ。そして 'CULT'

「(宗教的) 崇拝」と同族語であるということである。つまり、「文化」のはるか彼方に存在しているものは、「農耕定住民」の影である。「崇拝」は、そうした人々の生産に必須の活動であったのだろう。農耕をおこなうには、一定の土地の確保が必要であって、そこは長期間にわたり占有されることが求められる。「所有」がおこる。それは、「他者」の排除を前提とする。つまり、「文化」の彼方には、<農耕><崇拝><定住><所有><法>の概念が存在していたわけである。だとすれば、「脱・文化」とは、こうした概念の否定のうえに成立しなくてはならない。そこには<遊動>が是非とも必須となる。<農耕><所有>は、すくなくとも不可能である。<法>は<捷>のようなものになろう。<崇拝>も、決して体系化された宗教のものではなくなろう。こうした生活様式をおこなう民としては、すぐに<遊牧民>が想起される。

この<遊牧民>と<農耕民>との関係を、ジャック・アタリ⁽³⁾ はつぎのようにまとめている。(「」の部分のみ引用。)

<非所有／遊動><持ち=食べること><食人習慣>：

「今から200万年以上もまえ、一匹の動物がはじめて直立し、人類と名づけられたとき、食べるものをのぞいて、彼は何一つ自分のものを持ってはいなかつた」(非所有)。

「たえず仮の隠れ場や當てにならぬ食糧をもとめて、遊動(ノマド)する寄生者だった最初の人間は、老人、病人、動物物品をしょいこんではいなかつた」(非居住／遊動／非所有)。

「この幽暗のデビュー期に、人間が占有した最初のモノはといえば、食べるものの、狩猟、採集の所産だけだった。ごく自然で直接的な占有であり、法もなく、理由もなく、所有概念もなく、人はただ《持つ》のみであった」。「他人の肉体こそ、人間が力をつけるためにわがものとした、最初のモノの一つにほかならない。そこから人間は、世界と関係則のいくつかをひきだしてきたのである。死者は本質的な所有〔固有性〕である生命を奪いとられたものであり、したがって、生者にとって危険である。死者を食べることで、脅威力をわがものとする」(食人習慣)。

「おそらく、人類史において、実際の食人は、その危険な結果ゆえに、急速に消滅してしまったにちがいない。……こうして、最初の祭式化は、食人のタブー、人間を食糧にすることの禁止であった」(祭式／食人習慣)。

<武器を持つ狩人>：

「やがて人間は、……何千もの世代をくりかえして、共同の所有物、つまり衣類、道具、武器、小屋を運び、また死者を埋めたところで用意をしめす宗教的祭式をとりおこなう、何百万ものノマド〔遊動民〕の群れにふくれていった」(共有性)。

<遊牧民と家畜の群れ>：

「今から約二万年ばかり前にあると、氷河が後退し、気候も暖かくなり、湿気も多くなってきた。大型獣の狩が減少し、漁労と採集が発展し、特化はじめた。弓、釣

針、網、鉛、矢が出現する。ノマドの数もふえ、長命となり、子供の数も多くなって、ついで「移動の回数も漸減する」(脱・遊動)。「こうして、捕らえた幼獣をすぐに殺さないで、生かしておき、【貯蓄】、あとで消費するために集団と一緒に連れてゆくことがはじまった。金銭の貯蓄よりはるか以前に、まずもって生命の貯蓄【集約】があったわけである」(貯蓄／消費)。

「これは重大な変化だったといわねばならない。というのも、飼育して、繁殖させるために動物を保存しておくことは、動物の所有によって未来の消費が約束されることを意味するからである。消費と所有とのあいだに、一条の溝がうがたれ、この剩余によってはじめて人間集団は思うがままに財を増大させることができるようになった。この変化は、脳に記憶が刻みつけられることを、当然前提としている」(所有の増大化)。

<農民と種子>：

「牧畜とともに人間が発見した、持つと消費するとのあいだの区別を、農耕がさらに深くうがつたことにはまちがいない。……じつさいに農耕がいくつこかの地点で同時に発生した、というのが真相にちかいだろう。一番確かな推定によると、ノマドがはじめて畠を領有し、耕作したのは、今から一万年前のトルコにおいてであった」(脱・遊動／耕作)。

アタリが示した図式は、<遊動>→<遊牧>→<農耕>の過程であるが、すぐれた論考の中で片倉もとこは、これとは異なる図式を呈示している――

人間の歴史の初期において、アネクメーネ(人間がつねに住むことの不可能である地)にちかい、非常にかぎられた水しか存在しない環境にみずから生存をもとめねばならない人たちもいた。たとえば、アラビアの大部分においてである。

そこに生をうけた人々は、半島南端部から、農耕は不可能である沙漠にむかって移動した。不毛の沙漠でも生存していく洗練された生活様式、クーンの「ソフィスティケイテッド・システム」をつくりだしたのであった。それが遊牧という生活様式である。一般に遊牧は原始的で、狩猟採集と連続して出てきたものだとおもいこまれているが、遊牧は農業のあとでてきた高度なシステム思考を必要とする生産様式なのである。移動によって人間の生活可能地は、ひろげられたのであった。そこでは、農耕的な面の世界ではなく、遊牧的、商業的な「点と線の世界」が展開した。

遊牧は、羊、駱駝などの家畜を移動しながらそだて、利ざやをかせいで市場で売るという一種の商業である。駱駝をつかつての行商、キャラバンも、遊牧民の仕事であり、かれら自身、自分たちを商人とみなしている者がおおい。日本人が想像しがちな牧歌的な遊牧民は、断片的、部分的にしか存在しない。(4)

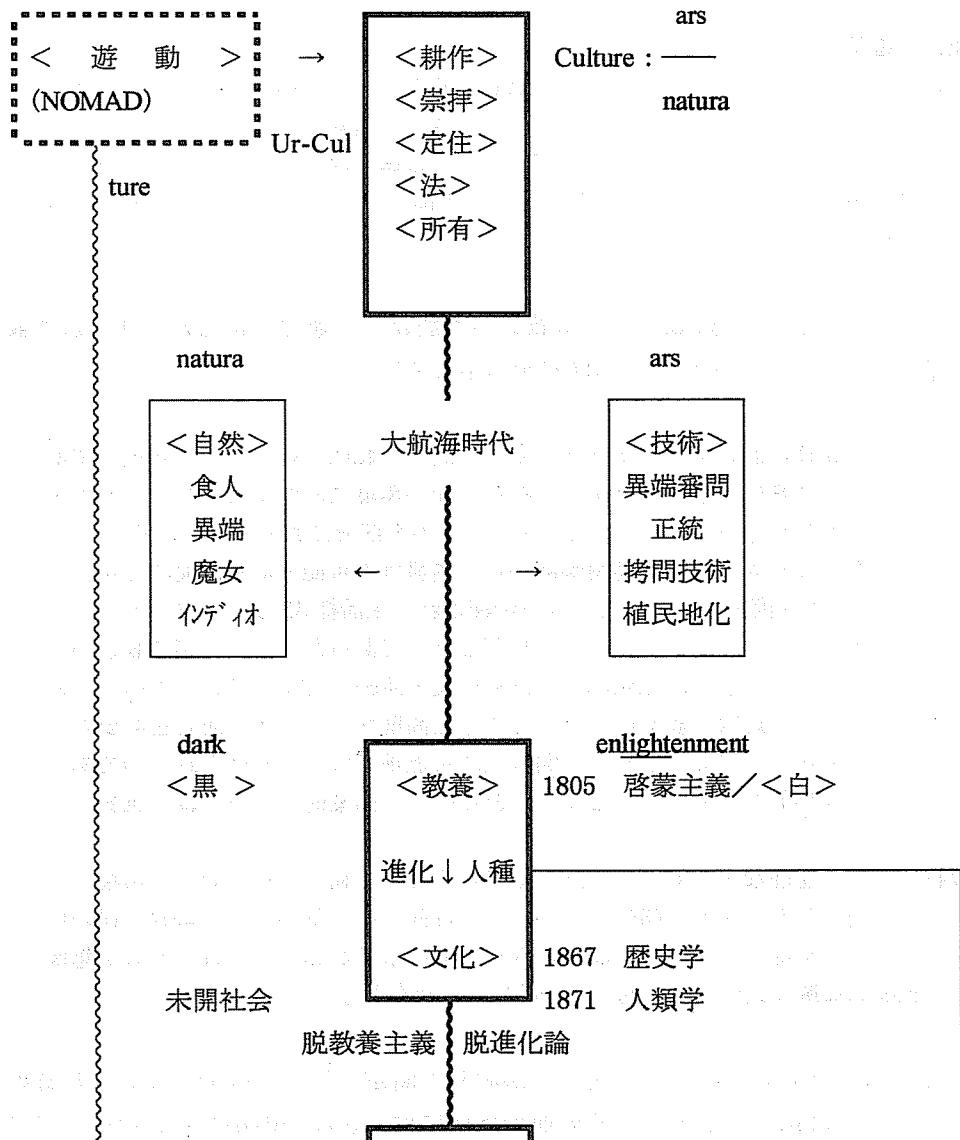
今のわたしには、どちらが正しく、どちらが誤りと断定することはできない。片倉の指摘は、アラビアには適用できても、その他の地域にはできないのかもしれない。アタ

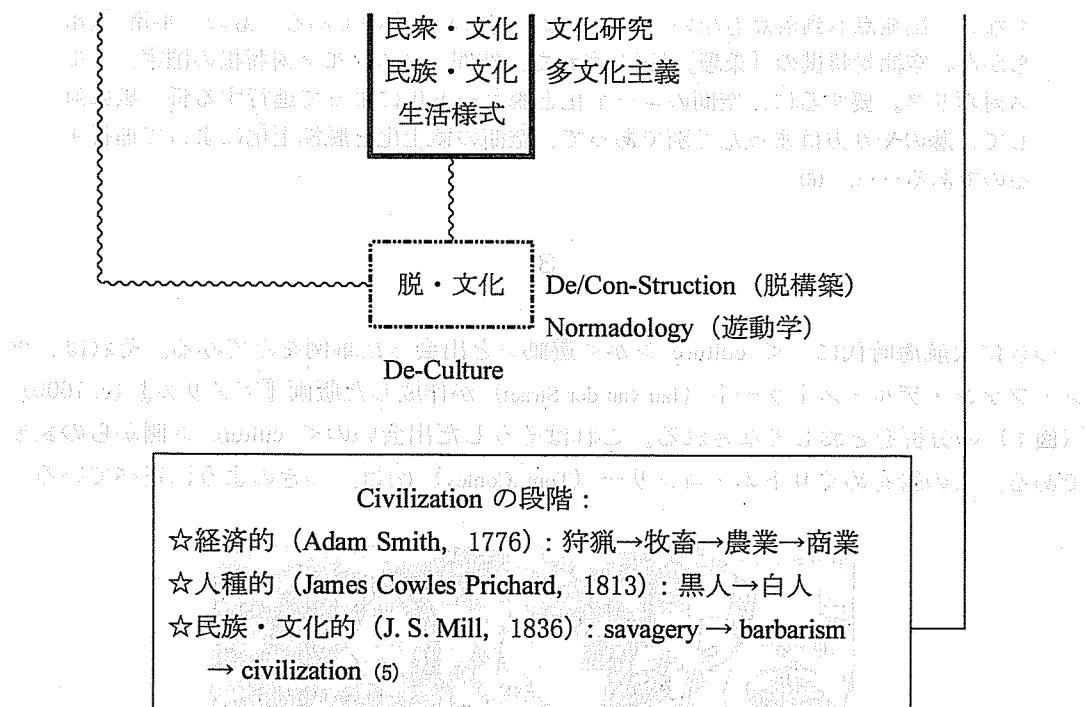
リの説でも、それは単純すぎて、人類の多様な生存の歴史に適用することはできないと思える。しかしあたしは、このふたつのモデルを'culture'への途、そして'culture'からの脱出の途に適用したいと思う。すなわち、<遊動>が 'ur-culture' の生活様式として、また <遊牧>が 'de-culture' の生活様式としてである。以上のことと、つぎにわたしが述べたい 'culture' の体制が西欧において引きおこしたいくつかの事例をふくめ、図示してみるとこうなる。

< CULTURE > 概念の変容

<暮>

<チエス> (Mille Plateaux)





ドルーズ&ガタリの『千のプラトー』では、<戦争機械（遊動）>と<国家（定住）>が、<碁>と<チェス>にたとえられている。それは、わたしの考える< Ur-culture >と< culture > の特性におおよそ対応している。

将棋は国家のゲームあるいは宮廷のゲームであって、それに打ち興じるのは中国の皇帝である。将棋の駒の総体はコード化されていて、おのおのの駒は、駒の動きや位置、そして駒同士の敵対関係を規定する内的本性つまり内的諸特性をそなえ、名前と資格を与えられている。したがって、桂馬は桂馬、歩兵は歩兵、飛車は飛車のままである。一つ一つの駒は、いわば相対的機能を付与された言表の主体であつて、このような相対的機能のすべては、言表行為の主体、将棋を指す人自身あるいはゲームの内部性形式において組み合わされる。これに対して、碁石は、米粒というか錠剤というか、要するに数的単位にすぎず、無名の機能、集団的ないし三人称的機能しかもたない。「それ」はひたすら進むのであって、一人の男でも女でも、一匹の蚤であっても象であっても差し支えない。碁石は主体化されていない機械状アレンジメントの要素であって、内的特性などもたず、状況的な特性しかもたない。……最後に、空間のあり方もまったく異なっている。将棋の場合、問題は、閉じられた空間を分配すること、したがって、一点から他の一点へと移動して、最小限の駒で最大限の場所を占拠することである。碁においては、問題は、開かれた空間のなかに石を配分して空間を保持し、いかなる地点にも出現しうる可能性を維持することである。石の動きは、一点から一点への移動ではなく、目的も目的地

もない、出発点も到着点もない、たえまない運動と化すのである。碁の「平滑」〔滑らかな〕空間対将棋の「条理」〔区分された〕空間。碁のノモス対将棋の国家、ノモス対ポリス。要するに、空間のコード化と脱コード化によって進行する将棋に対して、碁のやり方はまったく別であって、空間の領土化と脱領土化によって進行するのである……。(6)

3

つぎに大航海時代に、< culture >が<遊動>と出会った事例をみてみる。それは、ヤン・ファン・デル・ストラート (Jan van der Straet) が作成した版画『アメリカ』(c. 1600) (図1) の分析をとおしてなされる。これはそうした出会いの< culture >側からの表象である。この絵をめぐりトム・コンリー (Tom Conley) (7)は、つぎのように述べている。



(図1)

1.) 出会い・征服、そして発見をめぐる異様な夢のイメージのなかで、鎧兜をつけたヴェスプチは、大洋航海用の大型船から下船し、自ら手にした旗のついた棒を大地に立てようとし、今、彼の眼前にいる、裸で年頃の身体にアレゴリー化された大陸をみつめている。ヴェスプチは、まなざしをアメリカに向いているのだ。ド・セルトーにとって、この版画は、史料編集作業、つまり西欧の生産様式をかなり性差化した形で占有しているものの多くを要約している。この占有化によって、被植民者、他者、土着の主体、そして実に女性主体はゆるぎない場に固定されてしまった。(拙訳、以下同じ。)

2) この描写はさらに、ド・セルトーのテーマ、つまり<名づけ>の作用にからむ暴力をめぐるテーマを裏書きしている。アメリカは、名前と旗(*) というという鎧兜をつけ、<新世界>に自らを押しつけている。彼の眼差しは、文字どおり、遂行的行為を実演している——「わたしは、わたし自身の名であなたを専有することを宣

言する」。世界のなかでこれまで未知であった地域と<未知の地>（テルレ・インコグニタ）の広がりゆく地平を越えたところで、その地の名づけられていない、あるいは名づけられに習慣的実践活動（背景にみられる）が、この男性航海者の視界に入っている。（*gonfalon : 語源は'war banner'

3) しかし、興味深いことに……ヴェスプッチが左手にもついているアストロラーベ（天球観測儀）が、ハンモックのうえに直接位置づけられているので、一方の技術が生みだした対象物が、他方のものにくっつけられているように見える。ハンモックとアストロラーベとの接触点に、消失点のように、世界においてのふたつの見方、土地の区分の仕方、そして生き方の出会いが設定されている。アストロラーベは長い図像学的歴史をもち、その歴史はトレマイオスがつくった最初期のイメージまで遡る。……ヴェスプッチは、同じ姿勢を受け継いでいるが、今やアストロラーベは水平軸にセットされている。つまり、その水平にもとづけば、この旅行者は上空に、つまり天界ではなく、ひとの眼前に広がる物質界にとどまっている敷地、ひと、そして物を区分することができることであろう。ヴェスプッチは今や、トレマイオスを装い、腕をあげて西方に眼を向けるために伸ばし、征服する。

1) で注目すべき分析は、<culture> の代表である<ヴェスプッチ>と<ur-culture>の代表の<裸体の女性=アメリカ>の出会いを、<武具（衣服）>/<裸体>、<大型船>/<?>、<男性>/<女性>、<見る者>/<見られる者>との対立でとらえているところである。左辺がすべて<culture> の所産である。また、<旗竿>/<棍棒>（どちらもstaff）も注目すべきで、それはコンリーがいっているように、ヴェスプッチは大地にたてる（plant）ためにもっているのである。それは、その土地の<占有（所有）>を宣言することになる。つまり、<植民地>（colony）とすることである。ちなみに、'colony' と 'culture' は同語源の語である。また、旗に描かれた十字架は、<布教>を意味している。棍棒はジャック・アタリが述べていたように、<食べる>ための<所有>のための道具である。

2) で注目すべきは、<名づけ>の暴力ということ、つまり自己を押しつけることによって占有を宣言することである。それに対応することは、<名づけ>られていない、もしくは<名づけ>られない習慣、つまり<食人習慣>である。

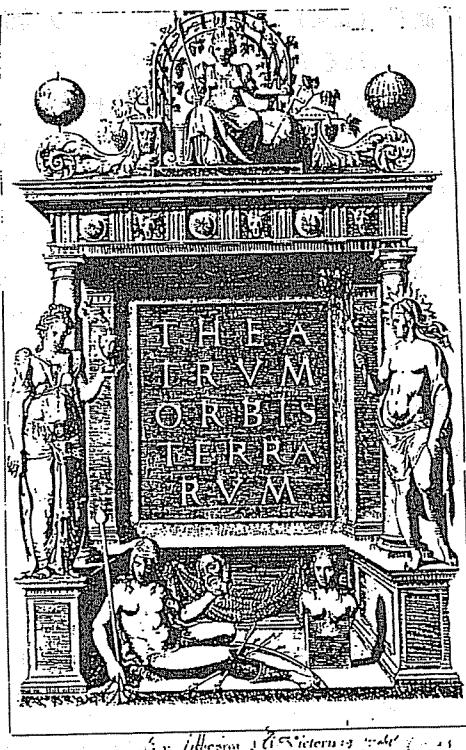
3) では、<天体観測儀（アルトロラーベ）>と<ハンモック>とが対置されているという指摘が興味をひく。ここでは指摘されていないが、このふたつのものは<遊動>具である。しかし、<天体観測儀>はもはや<定住>のための<遊動>の具になってしまった。それは<遊動>ではない。単に<移動>、あるいは<航海>、もしくは<遠征>の具である。また、ここで<天体観測儀>が<水平方向>に据えられ、<天体観測>ではなく、地上の<物質界>の場所、人間、物を区画するために用いられるとしていることが注目される。この点でヴェスプッチが両手にもつているものを、魔法の書と魔法の杖に置きかえ、裸体の女性（アメリカ）を<悪魔>（メフィストフェレス）にかえれば、それはクリストファー・マーロウの『フォースタス博士』の口絵に類似してくる（図2参照）。



(図2) 15世紀の占星術士



(図3)



(図4)



(図5)

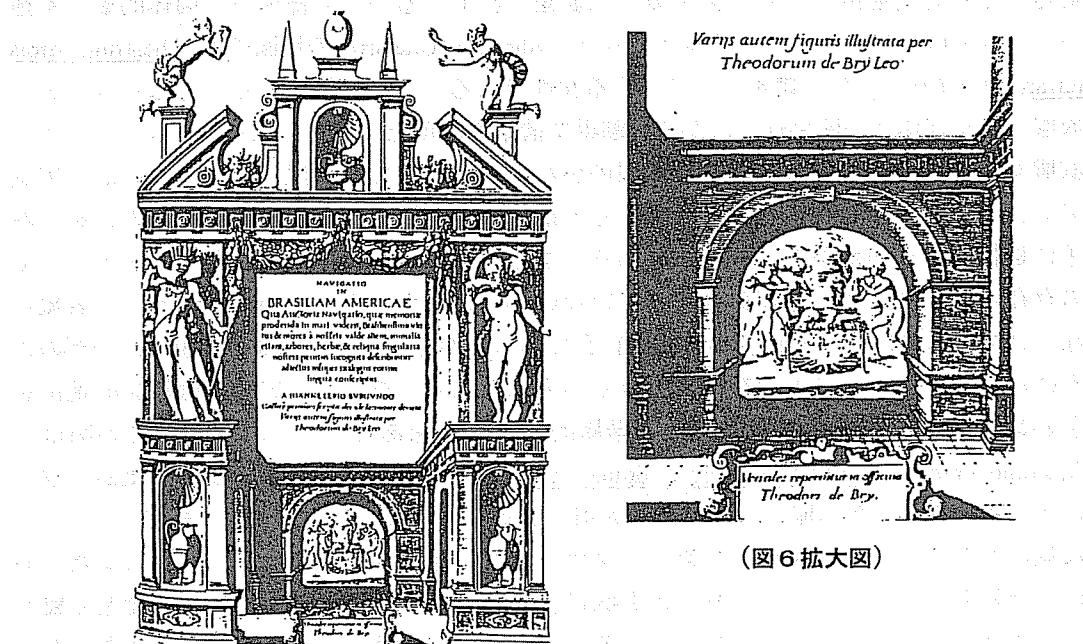
〈culture〉は、〈女性〉と〈悪魔〉と同じパラダイムに入っていたのである。とはいっても、ストラートの絵のヴェスپッチと裸体の女性の関係は、つぎのオロンス・フィネ (Oronce Fine) の Protomathesis にふされた口絵 (図3) の関係と同じだとコンリーは指摘している。このフィネの口絵の女性は、衣服を着ていることに注意。それは、天文を司るミューズ〈ウラニア〉 (Urania: 語源は〈天〉) である。つまり、天体観測儀はまさに〈天〉に向かっているのだ。そして、〈ウラニア〉は〈精神的愛〉としてのアプロディティである。これと対照的に、〈アメリカ〉は表象されている——〈裸体〉〈肉体的愛〉〈地〉。これとは、アブラハム・オルテリウス (Abraham Ortelius) の地図の本 Theatrum orbis terrarum (1570) の口絵 (図4) にててくる女性である。この口絵をみると、はっきりと〈衣服〉と〈裸体〉の関係性がわかる。劇場型構築物の頂上に座すのは〈ヨーロッパ〉で、衣服を十分に身にまとっている。衣服の少なくなる順序でいえば、左に立つのが〈アジア〉、右に立つのが〈アフリカ〉、そして最後に床に横座りして左手に男性の首を、右手に棍棒をもつのが〈アメリカ〉である。また、〈アメリカ〉の脇にあるバストは、その存在が知られてはいるが発見されていない〈マジエラニカ〉という。こうした表象がなされているのは、ヨーロッパが衣服社会であったからである。図5の解説は、つぎのようになっている——「近代初期ヨーロッパ人にもれず、ヴェニチア市民は社会的地位をきわめて意識し、その衣服は社会の階層的なりたちをあらわしていた。この図は、Giacomo Franco, Habiti d'huomeni et donne venetiane (Venice, 1610) にあるものだが、ヴェニチア貴族の夏と冬の服と、商人と職人用の服がしめされている」(8)。また、このような見解もある——「ルネサンス期イギリスは、布地社会であった。それはまた、お仕着せ社会でもあった。つまりその意味は、ふたつある。ひとつは、社会の産業基盤が布の生産と衣類の循環であったこと、そしてもうひとつは、布が主要な通貨であったということである」(9)。このようにみてくると、つぎの派生過程が考えられる—— Fine (1531) → Ortelius (1570) → der Straet (c. 1600)。

しかしながら、これでは十分ではなく、ストラートの絵には、中央奥に食人習慣が描かれている。これは、様々な絵をひきあいにだすことが可能であるが、〈アメリカ〉との関係でいえば、テオドール・ドブリ (Theodore de Bry) の著作『アメリカ』(1592)の第3、4巻の口絵 (図6) をもちださなくてはならない。凱旋門の左右の柱には、脚と腕をくわえている男女が描かれ、通路の奥では人肉バーベキューがおこなわれている。また、ヴェスپッチのもつ十字架の旗からいえば、女性の背後を歩いたり、また木陰に潜んだりしている動物は、魔女に仕える〈使い魔 (ファミリア)〉にみえてくる。もっともすでに、アメリカの動植物の生態は、かなり詳しく西欧につたえられていた。

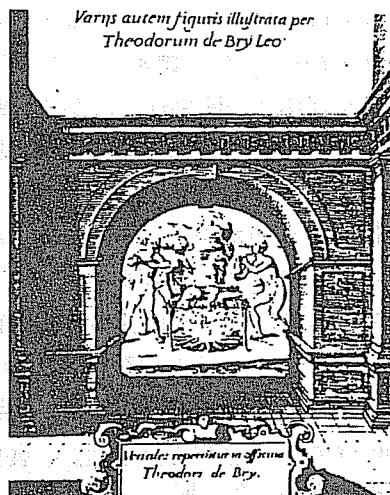
魔女といえば、もうひとつ西欧〈culture〉が生産した制度をもちださなくてはならない。それは〈異端審問制度〉である。図7にキリストの十字架像があり、その対極に審問を行う者が位置している。審問官は十字架を背景にしてことにあたっている。これが、新世界に導入されていったのである。中世に存在していた異端審問制度を、ルネサンス期に復活させたイサベルとフェルナンドの当初の目的は、つぎのようなものという。(10)

フェルナンドとイサベラは、長い間眠りつづけていた中世の制度を復活させた。それは、ふたりが1478年に教皇シクストス4世から許可をうけて、彼らが支配していた都市と教会区で異端審問官を任命したことである。新たに任命された異端審問官たちに、真の信仰を守護するように命じたこのカトリック両王は、背教と異端の探索をすぐにも超えて拡大することになる、ひとつの機構を始動させたのである。

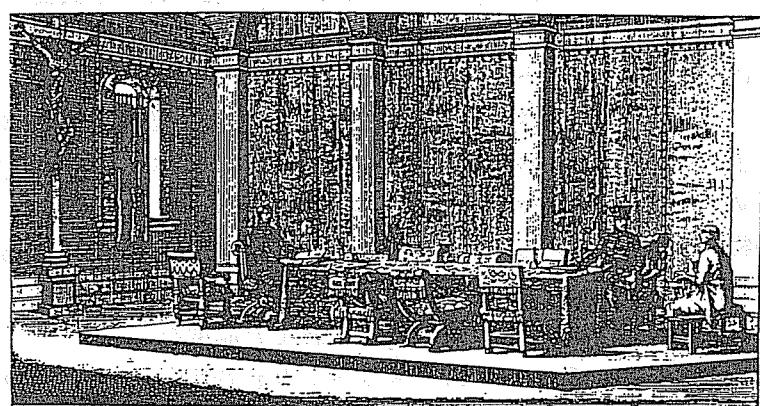
(拙訳、以下同じ。)



(図6) 帝國の宮殿



(図6 拡大図)

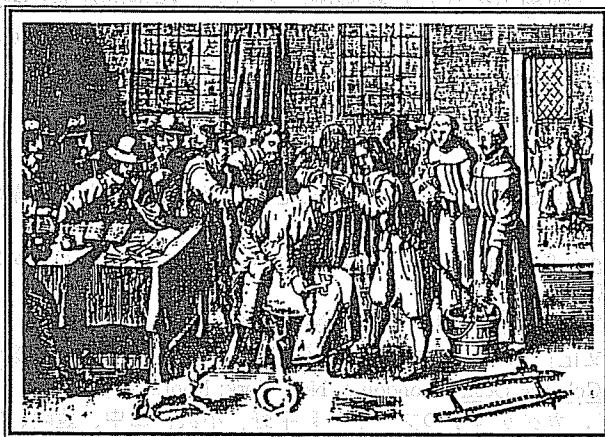


(図7) 帝國の宮殿

この制度が新世界にもたらされたとき、〈culture〉と〈de-culture〉とが衝突した。この制度をもたらす者たる修道士たちは、必ずしも異端審問官でもある。つまりは「純」教義の守護者である。フレンシスコ会修道士たちは、異端審問制度を新世界にもたらした。この地でそれは、イベリア半島のカトリック教と現地アメリカ人の諸信仰と正面衝突させたのである。(John Edwards) (John Edwards) (John Edwards) (John Edwards) (John Edwards)

13世紀にアラゴン王に限定されていた、教皇の審問裁判として静かにはじまつたスペインの異端審問制度は、そのはじめから、ラテンアメリカ世界全体で多くの種族間の、文化的出会いの主要な劇場となつた。

西欧の内部での、ルネサンス期の異端審問の適用は、魔女狩りであった。その拷問の様子は、図8の絵がしめしている。〈十字架〉、〈男／女〉：〈衣服／裸体〉、〈culture〉



(図8)

の生産した〈拷問具〉が注目される。ヴェスプッチとアメリカの出会いの絵にいかに類似しているか。こうしたことが、〈表象〉的一大特性である。

最後に、ストラートの絵のキャプションを読解して、「〈異文化〉の出会い」の意味を暗示しておこう。そこにはこうある。

AMERICA.

Americen Americus rexit, & Semel vocavit inde semper excitam.

従来、どういうわけかこの絵を扱う論文に、このキャプションを解読した例はみあたらない。'Americen'を'a-mericos'と読むと、それは「分けられていない」を意味する。それ

を十分に踏まえて読むなら、こうなる——「アメリゴは、アメリカ（まだ分断されていない完全な姿の女性=国）を発見した。ひとたびそう呼ばれるや、彼は以後ずっと彼女をそのように呼んだ」(11)。つまり、完全に<名づけ><植民地化>の読みに一致しているのである。そして、「Americus'つまり'Amerigo'は、英語にすると'Henry'に相当するのである（その他 Arrigo, Enrico, Enrica）が、「Henry」の語源は'house ruler (home + ruler)'であるので、「国の支配者が」とすることができる。まさに、「国の支配者」とは'culture'の制度であった。

'culture'をこのようにとらえるなら、<ユダヤ人>にみられた事態は<culture>ではなく、<de-culture>であったのであろう。たとえば、豚肉を食さないということは、つぎの説明が正しければ、そのことを示唆していることになろう。

古代のユダヤ陣は羊飼いで、羊や山羊のような動物の番をしていた。このようにして、分趾蹄の反する動物がそうした牧畜民にとって、標準的な食べ物となってい。その動物は家畜化され、食べられた。豚は、他方、遊動の羊飼いの生活にはつきりと不適切である。（拙訳）(12)

注

(*本稿は、平成10年5月23日に、日本ユダヤ文化研究会にて講演をした際の原稿をもとにしている。)

- (1) Edward T. Hall, Beyond Culture (New York: Anchor Books, 1976, 1977), p. 2.
- (2)『研究社・英語語源辞典』
- (3) ジャック・アタリ『所有の歴史』山内昶訳、法政大学出版局、第1章。
- (4) 片倉もとこ『移動文化』考——イスラームの世界をたずねて』日本経済新聞社、pp. 187-8)
- (5) Robert J. C. Young, Colonial Desire (London & New York: Routledge, 1995)
- (6) G. ドゥルーズ／F. ガタリ『千のプラトー』宇野、小沢、田中、豊崎、宮林、守中共訳、河出書房新社、pp. 408-9.
- (7) Tom Conley, The Self-Made Map: Cartographic Writing in Early Modern France (Minneapolis & London: University of Minneapolis Press, 1996), pp. 305-8.
- (8) John Martin, Venice's Hidden Enemies: Italian Heretics in a Renaissance City (Berkeley: University of California Press, 1993)
- (9) Subject and Object in Renaissance Culture, eds. Margaret de Grazia, Maureen Quilligan, and Peter Stallybrass (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), p. 289.
- (10) Cultural Encounters: The Impact of the Inquisition in Spain and the New World, eds. Mary Elizabeth Perry and Anne J. Cruz (Berkley: University of California Press, 1991), pp. ix-x.
- (11) 筑波大学文芸・言語学系講師・秋山学氏にご教授いただいた。
- (12) Charles Panti, Sacred Origins of Profound Things: The Stories behind the Rites and Rituals of the World's Religions (Arkana, Penguin Books, 1996), p. 398.

(あらき まさすみ・委嘱研究員/筑波大学教授)